

# 日本理科教育史（あるいは日本理科教授研究史） における和久正辰の位置

佐々木 洋

Masatoki WAKU and His Contribution to Science Education in Japan

Hiroshi SASAKI

## A. 緒 論

明治20年発行の「理科教授法」、およびその編者である和久正辰について、理科教育史に関する文献で言及しているものは見当たらない。同じ頃に他に二・三冊理科の分野で「〇〇教授法」と題した本は見受けられるが、これらはいずれも教授内容についてのみ扱ったもので、いわば教科書と同じ性格のものである。本論文でとりあげた上記の書は、それらと違い、まさに教授方法（教育観も含む）について述べたものであり、教師用参考書の性格を持っているユニークなものといえる。「理科」という教科は明治19年に初めて出現したことであり、同書は、理科教授法に関しては、本邦における最初の単行本である。したがって、日本の理科教育史上とりわけ貴重な文献である。にもかかわらず、今まで全く埋もれていたといえる。

本論文は、和久正辰およびその編書「理科教授法」に関する資料収集の中間報告と現段階での考察を述べたものである。また、明治19年に「理科」が発足するにあたって、和久正辰は後藤牧太とともに大きな役割をはたしたのではなかろうかという新仮説を本論文で提示し、今後の検討を待つことにした。

## B. 本 論

### I. 和久正辰編訳「理科教授法」について

#### 1) 編者の意図

同書の「例言」によれば、以下の3点にまとめられる。

- イ. 当時、理科の教授方法についての本が全くないこと。
- ロ. 「理科」のない尋常科でも実物教授で実験や観察をとり入れれば、作文などの分野で理科の入門的な指導を行なうことができることを示すため。
- ハ. いくつかの理科教材について具体的な教案を示し、これを理科の他の教材や、他教科で応

用できるひな型として活用できるように配慮したこと。

2) 原本の所在（国内）

イ. ギル氏 “Introductory Text-book to School Education”

国会図書館

ロ. ギル氏 “Notes of Lessons”

国会図書館

ハ. ベーン氏 “Education as a Science”

Bain, A. で同じ書名の1879年発行第3版が東京教育大学附属図書館にある。

ニ. フィッチ氏 “Lectures on Teaching”

Fitch, S.J. で同じ書名の1898年ケンブリッジ発行が同上図書館にある。

ホ. ペイン氏 “Lectures on the Science and Art of Education”

Payne, J. で同じ書名のロンドン1883年発行第2版が同上図書館にある。

ヘ. ジョーノット氏 “Principles and Practice of Teaching”

国会図書館

ト. セルドン氏 “Manual of Elementary Instruction”

Sheldon, E.A. で “A Manual of Elementary Instruction for the Use of Public and Private Schools and Normal Classes” のニューヨーク1878年発行第6版が同大学図書館にある。

3) 「理科教授法」第2ページに引用してある「応用心理学」の同定。

和久正辰訳「英国 惹迷左来 左氏応用心理学」であり、これとともに James Sully “The Teacher’s Hand-Book of Psychology” のロンドン1901年発行第4版が同上図書館にある。

4) 「理科教授法」でとりあげられた教材と明治19年文部省令第8号による「理科」の内容との共通性。

項目についても、それらの順序についても共通性はないといえる。この点は本論文で提示した仮説に否定的因子となる。

II. 「理科教授法」著作の背景に関する考察

- 1) 和久氏は当時、東京府師範学校々長として、教員養成にたずさわっており、教授法に関する本の必要性を痛感する立場にあったといえよう。
- 2) 編集によって本格的な専門書をつくり上げるというアイディアは、経歴にみられる新聞記者や大日本教育会評議員としての編集（を担当していたかどうかは現段階では不明であるが）経験によるものと考えられる。
- 3) 特に理科の分野を選んだ点について
  - イ. 特に教科として理科を選んだのは、先行する同氏の訳書の原本となっているサレーの著作中に、実物教授と理科とのつながりについてふれた部分があり、翻訳上の発展的関連性によ

るものと考えられる。

- ロ. 他教科についての教授法の著作は行っていないようなので、なぜ特に理科を選んだのかという疑問が起る。後藤牧太とほぼ同年配であること、および師範学校長、大日本教育会評議員という役職とを考慮にいとると、新教科「理科」の発足にあたって後藤牧太とともになり積極的な役割をはたし、そのゆきがかり上新教科「理科」の教授法について何らかの手本を示す責任を持たされ、編書「理科教授法」によってその責務を果たしたという仮説を立てることもできる。ただし、この仮説にはI-4)ですでに述べたように、「理科」の内容と「理科教授法」の内容とに共通性がないという弱点がある。

### C. 研究途上の課題

- 1) 和久正辰に関する資料の充実
  - イ. 履歴
  - ロ. 著書, 著述
  - ハ. 翻訳とその原本との対比考証
- 2) 当時の他教科における教授法研究の状態
- 3) 当時外国には教授法に関してどのような本があり、そのうちどのような本が日本に入ってきたかの調査
- 4) 関連人物や書店の解明
  - イ. 米人タイソン
  - ロ. 東京 牧野書房
- 5) 後藤牧太とのつながり  
いずれも慶応義塾の出身であることで、お互の交流の可能性は大きい。
- 6) 後世への影響の有無
- 7) 理科教育以外の分野での活動の評価

### D. 資 料

#### I. 和久正辰氏の主な履歴 (奈良県永年倉庫)

出身地 愛媛県

生年月 嘉永5年7月生 (1852年)

文久3年4月 伊予松山藩明教館に入り漢学修業

明治元年12月 松山藩洋学所に入り英学修業

〃 2年3月 藩命により慶応義塾に入り英学修業

〃 5年7月 慶応義塾卒業

〃 5年9月 東京本郷管相義塾に聘せられ英学教授 ~同年12月まで

- ” 6年2月 米人タイソンに就き哲学及び史学を研究 ～同7年12月まで
- ” 7年3月 日新真事誌社に入り編輯に従事 ～同7年12月まで
- ” 7年12月 東京曙新聞社に入り編輯に従事 ～同9年2月まで
- ” 9年3月 愛知県師範学校教頭に任ぜられ月俸50円給与 ～同10年4月辞職
- ” 12年4月 宮城県師範学校校長兼教授に任ぜられ月俸40円給与  
13年3月から当分、宮城中学校校長兼務
- ” 14年5月 宮城県書籍館長兼務
- ” 14年6月 宮城県博覧会審査官
- ” 16年11月 教育上功勞不少ノ故ヲ以テ文部省より二等賞を受ける
- ” 17年7月 宮城県師範学校校長兼教授を辞す。在職中勉勵につき金150円給与
- ” 17年9月 東京府師範学校校長兼教授に任ぜられ月俸40円給与
- ” 18年8月 大日本教育会評議員に選挙される ～同26年9月まで
- ” 20年4月 文部省より教育学免許状を下附される
- ” 20年9月 浄土宗大学林創立につき同校教頭兼教授
- ” 22年6月 東京府教育会附属教員伝習所主幹を依嘱され、一か年報酬120円交付  
～同29年8月京都へ移住につき辞職
- ” 23年2月 東京芝区教育会副会長 ～同24年3月まで
- ” 23年4月 東京府教育会参事并に商議員 ～同29年8月まで
- ” 23年10月 旧松山藩主伯爵久松定謨より同家家事諮問員を依嘱される ～同29年8月まで
- ” 23年10月 東京青山東京学館の講師に聘せられ、教育学、心理学并に論理学を教授す  
～同29年8月まで
- ” 24年2月 浄土宗淑徳女学校教頭兼務を依嘱される ～同29年8月まで
- ” 26年11月 東京明治講学会の講師に聘せられ、教育史を講授する
- ” 28年5月 東京大成学館の講師に聘せられ、教育学并に学校管理法を講授 ～同29年8月まで
- ” 28年7月 東京小石川区学務委員、同年9月同区学務委員長に選挙される ～同29年8月まで
- ” 28年9月 官立東京美術学校講師に依嘱せられ、一か年報酬120円交付 ～同29年8月まで
- ” 29年8月 東本願寺より真宗大学主幹兼真宗京都中学主幹を依嘱され月俸70円交付
- ” 30年3月 東本願寺新門跡大谷光演の教授掛 月俸80円交付
- ” 31年12月 当時の居所 京都新町仏光寺下ル
- ” 32年4月 \*奈良県郡山中学校長 年俸千円
- ” 35年6月 休職

(	*32年	奈良県郡山中学校	県立	普通科	5か年	学級数 13
				補習科	1か年	1

## II. 「慶応義塾総覧」明治38年11月30日発行（慶応義塾）

第139頁 第18章 卒業生

「安政五年本塾創立ヨリ明治六年ニ至ルマデ未ダ卒業ノ制ナシト雖モ其在学年限学力其他ノ廉ニヨリ卒業生ト同視スベキ者

〔下欄〕 旧喜佐雄 和久正辰 愛媛

## III. 「慶応義塾塾員学生姓名録」

「慶応義塾塾員姓名録」

「慶応義塾塾員名簿」

## 1) 第28頁 「同上」明治29年9月

愛媛 東京市小石川区竹早町77 東京美術学校講師 和久正辰

## 2) 第34頁 「同上」明治34年1月刊行

奈良県郡山堺町27 奈良県中学校長 和久正辰 愛媛

## 3) 第34頁 「同上」明治35年10月刊行

奈良県郡山堺町27 奈良県中学校長 和久正辰 愛媛

## 4) 第43頁 「同上」明治41年9月印刷

弘前市若党町46 青森県第一中学校長 和久正辰 愛媛

## 5) 第44頁 「同上」明治42年8月印刷

弘前市若党町46 弘前中学校長 和久正辰（特選） 愛媛

## 6) 第48頁 「同上」明治43年8月印刷

青森県弘前市若党町46 青森県弘前中学校長 和久正辰（特23） 愛媛

## 7) 第52頁 「同上」明治44年9月印刷

弘前市若党町46 県立弘前中学校長 和久正辰（特23） 愛媛

## 8) 第57頁 「同上」大正元年9月印刷

東京市小石川区高田老松町13<sup>〔ママ〕</sup> 著訳業 和久正辰（特23） 愛媛

## 9) 第73頁 「同上」大正5年12月印刷

東京市小石川区高田老松町14<sup>〔ママ〕</sup> 著訳業 和久正辰（特23） 愛媛

## 10) 第78頁 「同上」大正6年12月印刷

大阪市北区下福島2ノ351<sup>〔ママ〕</sup> 著訳業 和久正辰（特23） 愛媛

## 11) 第218頁 「同上」昭和3年10月印刷

大阪市北区下福島1ノ351<sup>〔ママ〕</sup> 著訳業 和久正辰（特23） 愛媛

## 12) 第241頁 「同上」昭和4年10月印刷

〔住所と職業の欄は空白〕

和久正辰（特23） 愛媛

（旧名 喜佐雄）

13) 第99頁 「同上」昭和5年11月印刷

和久正辰 | 愛媛 | | 特23 | | 松山市喜与町61

（旧名 喜佐雄）

14) 第107頁 「同上」昭和6年11月発行

和久正辰 | 愛媛 | | 特23 | | 松山市喜与町61

（旧名 喜佐雄）

15) 第112頁 「同上」昭和7年12月発行

和久正辰 | 愛媛 | | 特23 | | 松山市北<sup>〔カチ〕</sup>歩行町

（旧名 喜佐雄）

16) 第119頁 「同上」昭和8年11月発行

和久正辰 | 愛媛 | | 特23 | | 松山市出淵町84

（旧名 喜佐雄）

17) 第521頁 「同上」昭和9年11月発行

死亡者姓名 和久正辰（特選）

（旧名 喜佐雄）

### III. 和久宗通氏の筆者宛葉書の一部 昭和49年12月31日付

『前略、ご照会の和久正辰は私方に間違いありません。和久喜三郎正辰<sup>〔ママ〕まきとき</sup>昭和9年1月2日、松山市北歩行町16番地にて死亡行年83才。和久正辰を一言で言えば教育者という事になりましょう。

司馬遼太郎の「坂上の雲」の一、に出てくる和久正辰は名古屋が舞台ですが、私の記憶と違うところもあります。然しながら正辰の妻鍵子は名古屋出身ですから司馬遼太郎は松山と名古屋で調べたものと思います。参考までに書いておきます。

松山市北歩行町も私事応召中に戦災に遭い和久正辰の遺品とか書籍類も焼失し調べようがありませんが、ご通信によりますと理科教育関係の文献でとありますが、私の理解し得る程度に悉しくご通知願いますと幸と存じます。

敬具』

### III. 愛知教育大学名古屋分校回顧録編纂委員会「愛知教育大学名古屋分校回顧録」昭和45年

第2頁「明治9—1876—3. 和久正辰教務を掌理

4. 教頭・副教頭・訓導・授業生・授業生補の教員の職名を定め、和久正辰が教頭となる。

### IV. 愛知県第一師範学校一覧草案 一

「明治九年三月 附属小学校上等小学生徒 男子五十人ヲ募集シ其年令ヲ十四年以上十七年以下ニ限リタレトモ後ニ至リ十四年以下ニテモ試験ニ及第ノ者ハ入学ヲ許スコトニ改ム

此月和久正辰ヲ本校職員トセラル

同年四月一六ノ休日ナリシヲ改メテ日曜日トセラル

同年五月校則ヲ改正シテ上下等ノ別ヲ廃シ修業期限ヲ十五ヶ月トシ三ヶ月ヲ一学期ト定メ其習熟ノ遅速ニ依テ之ヲ伸縮スルコト、セラル其応募者ノ年令ハ満十八年以上三十五年以下ニシテ学科ハ文法史学地学物理学修身学生理学博物学経済学心理学記簿法数学化学画学小学校教科書会読教育論小学校授業法ノ十六科ナリ又公費生自費生ノ規則ヲ定メ、各百人ツ、募集ノ告示ヲ発セラレ公費生卒業後奉事ノ期限ヲ在学年数ノ二倍ト定メ教員ノ職名ヲ教頭副教頭訓導権訓導授業生授業生補トシ和久正辰ヲ教頭トシ監事ヲ置キテ訓導中ヨリ兼務セシメラル当時ノ校務ハ県庁第五課学務係員ヲ派遣シテ之レヲ官掌セシメラレタリ」

「明治十年一月伝習試験係ヲ廃シ教授改正係ヲ設ケラル

同年二月文部省直轄愛知師範学校ヲ廃セラレ其校舍図書器械器具等総テ本県ニ交付セラル依テ三月ニ本校ヲ其跡ニ移ス同月和久正辰職ヲ辞ス」

「教頭 | 明治九年二月 日 | 一年一ヶ月 | 月俸五拾円 | | 愛媛県 | 和久正辰  
同 | 十年三月 日 |

#### V. 森島良和「奈良県立郡山高等学校七十年史」昭和38年（奈良県立郡山高等学校 冠山会）

##### 1) 第27頁 一、年譜 明治32年

「三月 深井校長退職し、和久正辰校長に任ぜられる。」

##### 2) 第49頁 二、七十年の横顔

〔写真があり〕「第六代校長和久正辰先生」「三十二年四月、和久正辰先生校長として御来任。この先生も詳しい事は分らない。御在職も二年と一寸。」

##### 3) 118頁 郡山中学校時代の回顧 森口奈良吉（旧職員）

「私の最初の校長は和久正辰先生で、其後弘前に転じ、三十五年七月長崎県大村より彦根出身の百尾喬利先生が後任として赴任せられ、爾来大正二年六十一才で勇退せらるる迄勤続せられた。」

##### 4) 第120頁 六十年前の回顧 馬場文哉（明治36年卒）

「私は鹿児島で 同県立一中に入ったのが明治三十一年四月で一年級はその校で修め翌三十二年五月彼地を去って郡山に参り、二年級に転入学あとの四年間を母校に厄介になった。

その時校長は欠員で教頭金田檜太郎先生が校長代理をして居られた、それまで母校には兼子両平、奥山永隆、畠山敏好、正木直彦（東京美術学校長になられた方）、深井弘等大もの校長が就任して居られたので、欠員中の校長補充が時の県当局の頭痛であったが、寺原知事は思切って新聞記者の前歴を有せらるる異数の和久正辰先生を迎えることとなり、ここに永年に渉る空席が満たされて、大いに希望も湧き明るさも生じたものであった。処が一風変わった書生肌の

和久先生は私共ぼんやり少年には窺知しがたきルーズな事があった由で、先生の間には何か変なことがあって辞めさせられた方もあり、一方生徒間にも何やら険悪な空気に満たされて度々ストライキも起り、何のためであったか私も郡山通学生であるが故に引張り出されて、北郡山の某寺に遁走せしめられたこともあった。斯んな空気に満ちて收拾がつかなくなったのでしよう、和久先生は引責辞職さっさと引上げられたのが明治三十五年の春であったと思います。」

## E. 謝 辞

和久正辰氏が慶応義塾の出身である可能性が大きいことを示唆され、また奈良県立郡山高等学校関係者との連絡をとりもち下さった恩師中川逢吉先生に厚くお礼申し上げます。

元郡山高等学校々長東谷秋夫氏（奈良市立一条高等学校長）には「郡山高等学校七十年史」の借用および原資料の調査でお世話になりました。（資料V）

奈良県教育委員会教育放送課大久保信治氏（元郡山高等学校教諭）には奈良県永年倉庫の中の資料調査という大へんなお仕事をなさり、貴重な資料を御提供下さり、たいへん有難く感謝いたします。（資料I）

愛知教育大学附属図書館参考係長高原徹氏には原資料のコピーをわざわざお送りいただき、最高の参考業務をしていただき嬉しくお礼申し上げます。（資料III）

御子孫の和久宗通氏には没年月日という貴重な情報をお知らせいただきました。

最後に貴重な図書であるにもかかわらず、研究のために、心よく複写を許可いただいた国立国会図書館にお礼申し上げます。

この中間報告をもとにさらに充実した報告がまとまりますよう御教示や御援助を各方面のかたがたにお願い申し上げます。

〔註〕：〔 〕の中はすべて引用者〔本論文筆者〕による註である。

## F. 参 考 文 献

- 1) 堀 七蔵「日本の理科教育史」1961年（福村出版）
- 2) 板倉聖宣「日本理科教育史」昭和43年（第一法規出版）
- 3) 丸山 信「福沢諭吉とその門下書誌」昭和45年（慶応通信）
- 4) 「大日本教育会雑誌」第64号 p.654 明治20年（大日本教育会）
- 5) 安東久幸「日本理科教科書発達史」昭和51年（勁草出版サービスセンター）